thyee friends

杉の双子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｔｈｙｅｅ　ｆｒｉｅｎｄｓ

【Ｎコード】
Ｎ７９７３Ｘ

【作者名】
杉の双子

【あらすじ】
飛んでみたい、どこまでもどこまでも

1

「おはよう」
「あぁ、おはよう昨日さー・・・」
単純だな。中学校に入ってから友達との関係とかまた初歩に戻ったような気がする。
ほかの小学校から来てる人もいるから当たり前かも知れないけど。
あと3年。
ここにいるみんなと過ごすのはあと3年しかない。3年もって考える人もいるかもしれないけど、どれだけ続くか分からない人生にとって3年なんて年はそこまでじゃないと思う。
出会ってばかりで別れの事を考えるなんて少し変かもしれないけど。
こうやっていつも普通の恋の話とか友達の愚痴とか勉強の話とかして過ごして行くのだろうか・・・
それはちょっとつまらないと思う。

でも、少し前の話になるけど、ちょっとだけ刺激がある体験ってものはしたことがある。
誰でもあるのかもしれないけど・・・

その話をー、しようかなと思う。

2（前書き）

2

私は嫉妬をしている。
誰にでもないあなたに、とても強い嫉妬心を抱いている。
そのことをを気づいたのは、少し前のことだけどその思いはどんどん暗闇へ、黒く黒く深く深く染まって、落ちて行く。
『友達の友達は敵』
正論だ、今は本当にそう思う。
昔は、戯言だとかみんなと仲良くすればいいじゃないかとかそんな甘ったれたこ事を思っていたけれど、そんなことは絶対にない。それこそが戯言だと思う。
小学生低学年のころはさ、みんなで仲良くしましょうとか学校の先生はよく言うけれど、高学年ぐらいになると、言わなくなるだろう？だってあわない人ぐらいたんまりいるもんね。
そう人と無理に付き合っていたら、自分が壊れてしまう。
今の自分のように・・・
もう我慢しない。
（駄目だよ、怖いよ）
無理に自分を作りたてない。
（今までの自分は何？）
自分をさらけ出せ。
（無理だよ、無茶だ）
猫なんてかぶる必要はない。
いいこチャンの建前なんて壊してしまえ。
（そんなの・・・今までの私は、）

何だったの？って、自問自答を繰り返す。
いつまでも、いつまでも・・・
私はいつだって優柔不断だから。

3

新しいクラスの掲示板の前には人がいっぱい群がっていた。
私は、人が多かったから掲示板を見に行くのを、躊躇っていた。
すると同じクラスになった友達が自分のクラスを教えてくれた・・・。

そこまでお節介をかけなくてもいいと思ったが、自分もすこし躊躇っていたので一応感謝の言葉を言っておいた。
まぁ、新しいクラスには結構仲のよい友達はたくさんいる方だ。少し満足しているとやっぱり悲しい情報も入ってきた。
親友とは両方ともクラスが離れてしまった。
そう、両方。
親友が二人もいるのはおかしな話だろうか？
2、3年のときにできた親友と5年の時にできた親友。どちらかといえば今は5年の時にできた親友の方が仲良くしている方だ。
私の親友と私の親友の二人はあまり仲が良くない。
仲が良くないなんて言い方をすると、まるで喧嘩をしているように思えるが別にそうでもない。ただ、まだ、あまり関わりをもって無いだけだ。
けれど、その親友二人は同じクラスになったようだ。
二人とも早く仲がよくなって三人でいろいろできるかなぁ、なんて甘いことを考えていた。

私のクラスは三組だった。
新しいクラスの友達と六年三組に向かっていると、ふと私は思い出した。
私の好きな人のクラスはどこだろう・・・。
と、別にそこまで熱愛していることもなかったのでその思いはすぐ

にみんなのおもしろい話でかき消されていった。

早くついたので先に席についてほかの人が来るのを待っていると、男子のメンツには少し絶望した。
ださい人、というと少し可愛そうだけれど、かっこいい人というのはまったくいなかった。
そう思うと、親友二人がいる二組がとてもうらやましかった。
けれどやはり、新しい学年、クラスと言うものには希望を抱いていた。
これから始まる楽しい生活などにとても胸を弾ませていたのだ。それがどんなものになるのかも気づかずに。
そうしているとすぐに始業式は始まった。
校長先生の話が始まる。
うんうん、今年は結構良い年になるかな。
楽しい想像しかできなかったため、校長先生のまじめな話なんて耳には入ってこなかった。

4

始業式が終わって私は習い事へと向かった。
気づくと、同じ習い事に行っている子はたくさんいた。
自分も結構な量を習っていることは自覚しているが、算盤なんてマイナーな習い事に同じ学年で同じクラスにたくさんいるとは思わなかった。
いや、同じ学年にいる事は知っていたけれど、まさかほとんどが同じクラスになるとは思っていなかっただけだ。
　もう１２歳。若干誕生日が早いから、自分は学年が上がるとすぐに歳も上がるのだ。
１２歳にまでなると、いろいろと女子関係とかややこしくなるとか言うけど、そのまんまだ。
実際に今までややこしかった事はたんまりある。
そんな経験早過ぎないか、ってぐらい。
そんな経験をしてきたからこそ、めんどくさいことには首をつっこんでいないつもりだったんだけれど、人から見ると別にそうでもなかったみたいだ。
巻き込まれている、巻き込んでいる、その両方だと思う。
自分はいろいろと考えすぎてるんじゃないか、って思うことだっていつもだ。
こう思ってることさえも、みんなは考えてるのかなって、いつもいつも考えている。
この気持ちは正常なのだろうか、みんなもそう自分と同じ気持ちを抱いているのだろうか、って。
授業中とか１人でいるときはいつもこんな事を考えている。
考え込んでいる。意味も無い、なんにも意味も無いことを。
けれど、しっかり、空気には流れているつもりだ。みんなに合わせて、流れて、みんなと同じことをする。

そうすれば何事も無く事が過ぎていくだろうと、そう思ったから、そう考え付いたから。
それを実行していた。
「えっ、ななこもう準初段受かったの？やばっうちもがんばらないかんやん、もう」
算盤で一緒に座っていた純ちゃんがそう言った。
本当の所、多分受かったのは運だ。
算盤なんかに習っていて暗算ができないと言うものほど悲しいものは無いが、それは自分だ。
私は暗算ができない。だから段も応用という、文章問題でといているのだ。
純ちゃんの少々上から目線な言葉に少しいらっときたが普通に答えておいた。
「うん、たまたま応用があっててさ、うちって結構運があるかも。」
ははっと笑って2人とも算盤の練習問題に取り掛かる。
このごろ、友達の言葉にいらつく事は確かに多くなった。
少しの短い言葉だったとしてもいらついてしまう。我慢しようとしてもさ、すぐ表情に出ちゃうから、頑張ってセーブしてるんだけれど、時々それがきかなくなってしまうのだ。
　算盤塾は、家より少し遠いところにあった。
だから行き帰りの道のりは少しきつい。しかも。今はまだ春だから、少し肌寒い。
つめた風が首の横を通り抜ける。気持ちいかもしれない、そう思えるのはそろばん塾を出てから3分ぐらいの間だ。そろばん塾の中は、びっくりするほどあったかいからだ。きっと先生が寒がりなのだろう。
急いで帰らなければ、テレビが見れない、そう思い思いっきりペダルをこいだ。
その瞬間、クラスの友達（純ちゃんとその他）が手を振って呼んでくれた。

「ななこぉっばいばいっ」
「うん、ばいばぁい」
元気よくさよならの挨拶はした。
そう思えば、今日は親友は来ていなかった。
どうしてだろう。
いつもといえばいつもだけれど・・・
やっぱり親友が来ないというのは悲しい。
風邪でもひいたのかなとでも思い、自分は音楽プレイヤーを耳にいれ、自分の世界に没頭した。

5

親友の紗和が私の所に飛び込んできた。
一緒のクラスになれなかったねぇって、とても残念そうに私には言ってくれた。
紗和は、あまり人との関係を持ってない子で、昔から放課と言えばいつも教室の端っこで本を読んでいるような、そんなポジションの子だった。
それでも結構もてる子で、背もあるし頭もいいし、ただ少し運動神経が残念だっただけだ。
話聞き上手だったから仲良くなったのかな、って思う。
まぁ、紗和とは去年クラスと算盤と習字が一緒だったからかなりの時間を一緒にすごした。
ふと気づくと、紗和の後ろには綾もいた。
微笑んではいた。
けれど、何も言ってはくれなかった。
気まずい関係までは行ってないけれどこのごろあまり話しては無かった。
　三人で話してると、新しいクラスの友達がこっちへ来て私を誘った。
親友とはばいばいをして私は三組へ、二人は二組へと入っていった。
クラスでは、いろんな話をした。だれだれが好きだとか嫌いだとか、そんな話ばかりだった。
私はあまりそんなことは気にしていなかったので、ずっと紗和の事を考えていた。
今度なにして遊ぼうとか、算盤で一緒に座ろうかなとかそんなことだ。
「ねぇねぇななこはあいつの事どう思う？」
唐突に話が振られて私は少し驚く。

だが、そんなみんなの話など聞いていなかったため、もう一度言ってもらわなければならない。
「え？ごめん何が？」
「だからぁ、あいつだよ、あいつ。鹿野帆華。」
？。帆華。
帆華といえば、1年生から結構仲が良い子だ。
それがどうしたのだろう。
「え、どうしたの？」
「あいつってさ、先生の前ではぶってない？あたしそういうのいらつくんだよね。」
まぁ確かに。私もそういうのは大嫌いだ。
先生の前だけでは良い子ぶってる人。
だけど自分もそうだから、あまり人の事は言えない。
でも自分は、先生の前だけじゃないから。友達の前でも内心を隠して伏せて、いつも上っ面の言葉しかしゃべってない、というか話せなくなった自分だから。
あまり人の事は言えないのだ。
「うんん、まぁそうだよねぇ。」
適当に場を流す、それでいい、それが一番いい、そう確信が今では持てる。
大体、今その愚痴を言っている少女自体、私はあまり好いてはいない。だからといって別に嫌いでもない。
元、私はその子にいじめられていたから。
いじめし返したけど。それが駄目だったのかもしれないけれど、逆にそれで今までのギクシャクしていた関係がお互い言いたいことを言い合うことで吹っ切れたとも言える。
だから、今では別に嫌いじゃない。
かといって、紗和じゃない方の親友。綾。
あの子にもいじめられていた。あの子のこともいじめていた。
女王的な存在でさ、今愚痴を言っている少女にからかわれていたん

だ私達は。
だから、最初は私と綾は互いに憎み合って、死んでほしいとじかにいえてしまうほどひどい状況だった。だって綾が死んだら私はいじめられないですむから、女王様に気に入ってもらえると思っていたから。女王的な存在にあげたものは色ペン多数、メモ帳多数・・・。今から思うと別にたいしたことは無いのだが、昔の私にとっては大出費だった。
結局その後、私と綾、そのほか多数は仲良くなり、女王的な存在はいままでいじめを続けてきたばかりにみんなに反感を買って、沈んでいった。
助けたのはまたみんなだけれど。
別にいいんだ。そんな昔なこ事。今いえる言い分。
今が楽しく過ごせるなら、昔の事など、どうでもいい。
そう思ってないと、いろいろつらいことが多すぎるから。

だが、我慢の限界はすぐに来た。
みんなが言うとおり帆華はかなりいらつく。私達の前では愚痴言ってるのに、先生の前ではぶっていい点もらって、私達はもろ悪役。
だから今日から私達は帆華にあだ名をつけることにした。
帆華の前で悪口を言っていたらすぐに気づかれてしまうからね。
ネッシー、そう決めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7973x/

---

thyee friends

2011年12月10日23時54分発行